International Islamic Federation
of Student Organizations

イスラームの生き方

イスラーム入門シリーズ

8

بِسْمِ ٱللَّهِ ٱلرَّحْمَٰنِ ٱلرَّحِيمِ

IN THE NAME OF ALLAH
THE MERCIFUL THE COMPASSIONATE

AL-FAISAL PRINTING CO.
P.O.Box 19673 Khaitan-Kuwait 83807
.Tel: 2446740 - 2446838 - 2446847

نظام الحياة في الاسلام

أبو الأعلى المودودي

باللغة اليابانية

الطبعة الأولى

الاتحاد الإسلامي العالمي
للمنظمات الطلابية

١٤٠٦هـ - ١٩٨٦م

イスラームの生き方

イスラーム入門シリーズ

I.I.F.S.O.
1406 A.H. — 1986 A.D.

目次

第一章　道徳の意義

法律が社会の安全を護るルールであるのに対して、道徳は人間の在り方に関する正邪の基準といえそうです。そこでは、行為の善悪を人間性の完成に照らして把えるわけですから、その基準が社会一般に承認されたものであっても、法律のような外面的な強制力は持たず、あくまでも個人の内面に係わる問題なのでしょう。

とはいえ、個人が過去・現在・未来を通じて独自に存在することはあり得ないはずですから、個人の内面とはいっても、そこには他人の存在が大きく係わってくるのです。当然、他人の反応に照らして自らの在り方を確認していく作業が求められます。

地球が広く、コミュニケーションの手段が限定されていた時代は、地域社会での共通の価値観は得やすかったのでしょう。同じものを食べ、同じ言葉を使い、同じ景色を眺め、同じように生きていたのですから、話さずとも判る前提や不文律があり、共通の道徳観が存在しました。変革はあっても、いわばコップの中の嵐にすぎず、全体の枠組を破壊するまでには至らなかったのです。

おそらく最初のころから、人間は環境の支配を夢みていたのでしょうが、潜在能力の発現に応じて、その希望は叶えられていきました。あらゆる敵と闘い、非凡な能力を駆使してこれを屈服せし

め、生存を確保し、大地に満ち溢れました。

しかしヒトの生存能力は、人口爆発につながり、豊かさとは反比例する様相を描き出したのです。種の保存本能は薄れ、個の豊さを追求しはじめ、富や宝を追って血眼となって大地を駆けめぐりました。全体の明日を考えることは止め、今日の富を追いました。それはいつからのことだったのでしょう。その兆が見えたときから、他人は敵となったのです。個人は隣人を、集団は他の集団を、国家は他の国家を、敵とし、競争相手として、限定された富を奪い合うようになりました。そして人間の思考は、その方角に突っ走り、共食い闘争に奉仕してきたのです。地球は狭くなり、隔離された地域社会は存在できなくなり、前提や不文律や道徳は砕け散りました。その代わりに、不信と不安が支配しています。一見平和や安穏があるように見えても、それは力の均衡によってもたらされたものです。あえていえば、恐怖のバランス、それが今日の世界かも知れません。愛や共感を基盤とした社会ではなく、法律の強制力だけで必死に秩序を保とうとしている現状です。不信や不安に揺れ動く人間存在を、単なる力関係でおさえこもうというのですから、絶望的なあがきにすぎません。

このような不信と不安から人間を救うためには、どうしても、人類共通の価値観を持たねばなりません。それは、現在偏重主義と決別し、人類の未来に思考を向けなければ、得られないでしょう。

それも、来年や再来年、十年や二十年後の未来ではなく、百年先、千年先の人類まで想定したものであるべきでしょう。

言語や食生活、皮膚の色、民族や国家、宗教やイデオロギー、ともすれば違いばかりが強調される今日、人類共通の価値を求めることは、抽象概念としては可能であっても、実際感覚としては容易ではありません。それは、時間の速度に対しての情報の密度が濃くなればなるほど困難になっていきます。現在という瞬間の重みが増すからです。そして時間の長さと空間の広さは人間の無意識の部分で合致していて、瞬間を考えることと、個を考えることが連動するからです。

違いが強調され、不信と不安が増幅される、現在偏重という牢獄から脱けて未来を考えるとき、個は初めて種の共感を得られるものと思います。そのとき初めて、人間存在の意義について考えられるのです。

単に、世界平和や思いやりを説いても、これは空念仏にすぎません。生命の尊貴を説いても、なぜという疑問が残ります。なぜ人間が存在しなければならないのか、という質問です。これに答えられなければ、人間としての価値観や道徳は存在し得ません。過去の道徳が、形式のみの、絵に書いたモチになってしまったのは、現代人の論理に対して、納得のいく答えが出なかったからです。神を持ち出しても、その神が宇宙のどこかに居る人格神ならば、納得できるわけもありません。そ

の彼（または彼女）を愛し求めるにせよ、畏怖して遠ざけるにせよ、自分とは時空間的に離れた場所に置いてしまうからです。このような観念を抱くから、神の否定や、盲信に陥るのです。「信仰とは、信じ難きを信じることなり」というのは、西欧思想のため息でしょう。

イスラームの神は、そのような架空の存在ではありません。それは、宇宙を成立させた根本の真実であり、秩序を支える根本の力、あるいは意志なのです。物質の究極の「単一不可分」の要素とされたアトムの延長にある物質のみならず、光やエネルギー、重力や時間や空間、人間の思考までに共通する「単一不可分」の根源（アラビア語のアハド＝神の別名）なのです。この神を否定することは、自らの存在を否定することと同義であり、この神に返逆することは、自らの実存に反逆することです。同様に、その神を畏怖することも、自らの命を畏怖することにつながります。単一不可分であり、宇宙全体に漲っている根本の意志、これは人間が愛し、崇め求めるべき唯一の対象であり、恐れたりする対象ではありません。神を怖れる、ということとは、神を大切にするということであり、自らの実存の基盤を損ねたり失ったりすることを懼れるという意味でしかありません。神に対する罪は、こういう意味で、自らの実存を損ねるものなのです。

この神を意識し、大切にし、崇拝することによって、人間の過去・現在・未来は浄化され、実存は確立され、人間完成への道が開けるのです。ここから現出した人間の道徳こそ、現代を救い、世

界平和をもたらすものでしょう。

この根源からの言葉を伝えたのが預言者達であり、その最後がムハンマドです。彼は神の言葉クルアーンを伝え、それに基づいた生き方を描き出しました。そこでイスラームは、道徳や価値判断の基準を聖クルアーンと預言者のスンナ（言行）に求めるのです。

この書の第一章において、私は「神」という言葉を使いましたが、アラビア語の「アッラー」は唯一の神、あるいは人間が崇拝すべき唯一の対象という意味です。神という日本語、あるいはゴッドという英語には、このイスラームの説く「根本意志」または「根本真実」という概念には合致しない解釈がつきまとうようです。そこで第二章以降は、アッラーに統一いたしたいと思います。

第二章　イスラームの道徳の基礎＝信仰

イスラームには、信仰（イマン）と善行（サリハット）に基づいた人生の歩み方が示されています。

時間によって誓う

まことに人間は喪失の中にいる

信仰を持ち善い行いにいそしみ

真理のためまたは忍耐のため

互いにはげましあう者たちの他は。

（聖クルアーン　第一〇三章一―三節）

信仰とは、アッラーの実在と預言者ムハンマドの真実を信ずることだけではありません。信念を実行に移し、アッラーと人々に対する義務を遂行することが重要なのです。むろん、創造主と支配者であられるアッラーへの義務が他のすべてに優先すべきことはいうまでもありません。

言え、なんじらの父・子・兄弟、なんじらの妻と近親者
なんじらが取得した財産、停滞を怖れるなんじらの商業
そしてなんじらの好む住居
もしこれがアッラーとみ使い、ならびにその道のために奮斗するより
好ましいのなら、
アッラーの判決が下るのを待つがよい、
アッラーは反逆の民を導きたまわぬ。

（聖クルアーン　第九章二四節）

アッラーへの信仰と信頼は、信者の意志と言行によって表現されます。信仰を言明し、感謝と謙そんと愛を持ってアッラーを思い、意図を清浄なものとし、そしてアッラーの命令とみ使いのスン

ナを実践し、他人に教えることなのです。

アッラーとみ使いに従え
もしなんじらが信者であるなら。

（聖クルアーン　第八章一及び二〇節）

アッラーへの帰依とは、個人的な徳を積むことに限定されるわけではなく、個人的、社会的、経済的、国際的など、あらゆる面にわたって拡大されるものなのです。

個々の信者は、そして全イスラーム社会は、この世にアッラーの道徳律を樹ち立てるための努力を義務として負わされているのです。聖クルアーンによると、現世は試練の場にすぎず、死後の生命こそ人間の終着点なのです。

富と子女はこの世の装飾である
だが永遠に残るもの、すなわち善行こそは
アッラーの前でより良く
報奨と希望の基礎としてすぐれたものである。

（聖クルアーン　第一八章四六節）

このように、現世での行為の総決算のため正義と慈愛の根源アッラーへ戻ることをムスリム（イ

スラーム教徒）は常に確信しています。そして現世での生活は、次の永遠なる生命への導入部分として重要なのです。鳥が陽光や他の条件を独自の時間感覚に照らして帰巣の方角を判断するように、現世での人間も根源を意識し、万象に照らして確認し、アッラーを求め、アッラーに従い、その道に合致した善行を行なうのでなければ、帰り着くところはとんでもない場所になってしまうでしょう。根源からの呼びかけに耳をかたむけてください。

おお平安なる魂よ
歓迎を受け喜びをもって
なんじの主のもとにかえれ
われに仕える者の仲間となり
わが楽園に入れ。

（聖クルアーン　第八九章二七―三〇節）

一方、来世を信ぜず、現世に没頭するあまり未来のことを考えぬ者は、現世での成功と喜びを最終目的としているのです。

まことにわれとの会見を期待せず
現世に満足し（来世が存在せぬように）

これに安じている者
ならびにわがしるしを
意にとめぬ者の住居は
当然、地獄の劫火にある。

（聖クルアーン　第一〇章七―八節）

信者の特質の一つは、謙そんと感謝の心です。アッラーによって創造された人間は、その生存から生活にいたるまで、あらゆる面でアッラーの無限の慈悲を受けています。そのような広大なお恵みに対して感謝の目を向けるのは人間として当然の義務でありましょう。その気持が、アッラーをたたえる言葉及び礼拝に発現されるのは当然のことでありますが、そこにとどまることなく、アッラーからの賜わりもの――富、知識、才能、成果など――を他人と分ち合うことが重要なのです。

これとは正反対の態度――アッラーの恩恵に対する忘却、自己憧着、学識、富、地位、家系、人種、民族への誇りなどは現世での人間の立場とアッラーの絶対的な力と慈愛に対する理解の欠如であり、言うならば信仰のなさを示しているのです。

信仰を持ち善い行いにいそしむ者には
当然の報奨を与え恩典を増したもう

だが尊大で高慢なものには、痛烈な罰を下したもう
その者たちはアッラー以外には
保護も援助も見つけることはない。
（聖クルアーン　第四章一七三節）

人間に慈愛を与え、その後取り上げたら
必ず絶望し、神を呪う。
だが困難の後、恵みを与えると
不幸は去ったといい、うぬぼれ、高慢になる。
忍耐し善を行う者はちがう
彼らには赦しと偉大な報奨がある。
（聖クルアーン　第十一章九―十一節）

1. 安定した人生

クルアーンでは、人間は純正な心ハニフを持って生まれるものとされています。ハニフは実存の根底にある創造の大方針に従うことで、それを好む姿勢であり、また根源を求める無意識の衝動ともいえます。その心は、悪に対しては良心の声として、善に対しては行動をうながす囁きとして、

常に訴えかけてきますが、瞬間に留り、表面的な出来事に一喜一憂する心は、その声に耳を閉ざしてしまいます。心のかっとうは、意識の参加を得ぬまま、幕の背後で行なわれます。根源や未来に対して閉ざされた心は、刹那的な悦楽に酔い、一時的な安堵を得るかも知れません。しかしその状態は持続せず、瞬間から瞬間へ、点から点へと飛び移り、新しい変化を求め、新しい悦びや安堵感を追い廻すことになります。表面的な変化を追い続けるのですから、いつかは疲れ果ててしまいます。幕の背後での暗闘はそのとき表面化し、意識を襲い、人間の心を大きく揺さぶるのです。そこにいくつかの真剣な悩みが加われば、ストレスが生じ、場合によっては人格が崩壊し、あるいは生気からの逃避を試みてしまうかも知れません。

このハニフを肯定し、常に新鮮に保ち続け、聞く耳を持つことで、暗部での闘いは消滅します。心の基部と同調した意識を持つことですから、かっとうはなくなります。根源を考えるのですから、表面的な出来事に振りまわされることもなく、ストレスも逃避もなく、持続する人生の喜びが得られます。ハニフを大切にすることで、安定した心が得られ、本来の人間性が発現され、巨大な原動力を持って人間完成の大道を歩むことが可能となります。

純正なる道、人間創造の根本へ

しっかり顔を向けよ

（聖クルアーン　第三〇章三〇節）

すなわち、アッラーが唯一であることを信じ、善行に近づくのは人間の本質なのです。

まことに
われは人間を
最善の形に創った。

（聖クルアーン　第九五章四節）

この点でイスラームの人間観は、魂に「原罪」の重荷を負わせたり、肉体的欲求及び本能的欲望が精神的進歩を阻害すると見る他の宗教とは全く違っているのです。

イスラームは人間の人格を分離不能の統合的なものと見ており、全資質の合計がすなわち人間であるとしています。論議のため、あるいは何かを強調するため、人間の精神、知能、情緒、生物学的な面その他を個別的に取り上げることは可能ですが、実際上その一つ一つは互いに密接な関連を持ち、人格の内に融合されているのです。

このように、イスラームは宗教的な面と日常、神聖なものと世俗的なもの、アッラーを意識しての行為とそれ以外の行為などの間に区分や二重性を認めておりません。聖クルアーンでは、礼拝、断食、喜捨、巡礼などアッラー崇拝の行為が定められていますが、それらの行為が信者に肉体、感

情、知性、社会的及び物質的の面で多くの恩恵を即もたらすことにつながるのです。

イスラームでは現世的な事柄――たとえば商業、司法行政、金の貸し借り、結婚と離婚、飲食など――について一定の法令を定めてありますが、そこには精神的な面が十分考慮されているのです。

アッラーを意識し真に安定した人生とは、人間存在の種々な面における平衡状態にあり、一つの面を極端に抑え他の面を強調することではありません。礼拝、断食、聖クルアーンの朗読などの敬虔な行為は信者の生活において基本的で最も重要なものでありますが、同時に人生における、多くの重要かつ基本的な面と並行されねばなりません。そしてこれらすべての面でアッラーを思い、その意志に沿うよう努力すべきなのです。

信者は、人間の自然な欲望を捨て去ることを要求されていません。ただ、あらゆる欲望とか好みを定められた範囲内に、停めることを期待されているだけです。

イスラームには、牧師など特殊階級の人しか行えないような神聖な儀式など存在しないので、そこには信者の精神的活動を統轄する聖職者階級も存在いたしません。人間に関するあらゆる事柄はすべての人びとの連帯責任にあり、個人は、自分自身がアッラーの定めた制限を越えぬよう十分注意すべきなのです。

またなんじらのうち一団の者は

人びとを善きことに招き
正しきを命じ邪悪を禁ずるであろう、
これらは成功する者たちである。
（聖クルアーン　第三章一〇四節）

この実際的な意義は、信者がアッラーの命じたこと、禁じたことを学んでそれらを守り、そのことを他人に教え、地上にアッラーの法律をうち立てるため努力すべきとの勧告にあるのです。

聖クルアーンでは、人びとが知性と感性をもってアッラーに近づき、人生を生きることが要求されています。他の人びとの行為を、ただ「みんながやっているのだから」との理由で無分別にまねることは信者に許されることではないのです。

人びとのうち
知識ある者のみ
真にアッラーをおそれる。
（聖クルアーン　第三五章二八節）

ここで言っている「おそれ」とは、敵に対する恐れというような意味ではありません。たとえていえば、水や空気がなくなることへのおそれであり、生命の電源から切り離されてしまうおそれで

あります。アッラーを愛する、大切にするという意味であり、それを一段と強めた言い方なのです。その価値が認識できる者は、知識ある者のみであるといい、知識を得ることの大切さを説いています。この知識はもちろん、単なる平板な表面的なものではなく、人生百般に応用が利く、根源を指向する奥深い知識を指しています。

また、聖預言者ムハンマドは次のように言っています。

「知識を求めることは、男女を問わず、全ムスリムの義務である」

その意味は、もし物事を理解しようとせず、深く考えもしないなら、たとえ誠実さがあったとしてもそれだけでは不充分だということなのです。誠実さは理解力を伴わなくては完全とは言えません。

われわれムスリムは、アッラーの律法が勝手な気まぐれなどではなく、また圧制的な実行不可能なものでもないことをよく知っています。無限の知恵と慈愛に満ちたアッラーは人間の肉体と精神の両面の必要に合わせて道徳律を定めたのであり、それは、他のすべてを支配するアッラーの「自然の法則」と供に永劫不変のものなのです。

アッラーこそ人間のすべてを知っているのですから、その法律はどの時代にもあてはまり、そして

て万人共通のものなのです。しかも、人間のあらゆる状態を考慮に入れて作られ、極端をさけ、中庸の道を示しているのです。

この道徳の中のどの部分でも無視するなら、その社会には必然的にある種の腐敗が生じます。そのような例は過ぎ去った民族や文明の歴史の中で見られ、また今日の世界は腐敗の渦に取り巻かれているのです。

意識的に、あるいは気付くことがなくとも一つの分野において道徳原理に従うとき、そこには良い結果が明白にあらわれるのです。しかし同一の社会において、他の条項のいくつかが守られなければ、そこには悪い結果があらわれるのです。現代においても、十分な力を持つ一人の人間が、道徳律を無視して社会に大きな害毒を流し、あるいは社会を破壊するまでに至るのは、多くの例が証明しているとおりです。現代の世界では、このような多くの問題、すなわち階級的差別と相互憎悪、国家利益の追求と戦争、民族闘争、無制限の物質主義、犯罪の増加、家庭の破綻、放縦な性関係、麻薬やアルコールへの耽溺などが増幅され個人と社会にいちぢるしい弊害を及ぼしています。むろん、これらがアッラーの道徳律を尊守しないところからきていることは言うまでもありません。

逆に、アッラーの律法に従った生活は、外的環境のいかんを問わず、各人に平穏と調和と安定をもたらします。この律法を守ることによって、人びとは利己主義、貪欲、高慢、不正、不正直など

から脱し、尊敬、調和、協力の満ちた兄弟愛の社会へと移行して行くのです。生存のための「競争」より「協力」、「私欲」より「奉仕」、「支配」より「協議」、などが社会、経済、政治におけるイスラームの指導原理なのです。

預言者ムハンマドと教友たちの生き方こそ、この理想的社会の実現であったのですが、それは世界歴史でも、おそらく唯一のユニークな例証と思われます。とはいえ、今日においても、もし全ムスリムがアッラーの命じたことを忠実に実行するなら、そのような理想的社会を再建することは可能でしょう。

次に、イスラームの教えが個人の性格、対人関係、社会的責任、経済的および行政上の問題、アッラーへ帰依のための努力などさまざまな面でどのように規制しているかを聖クルアーン及びスンナによって調べてみましょう。

3. 人間の性格

社会の質は構成する人びとによって定まるのですから、まず最初に人間の性格をここにとりあげてみましょう。

イスラームの教えのなかで最も強調されているのは「アッラーを意識する」ことですが、これは

アラビア語の「タクワ」の大体の意味です。「タクワ」とは、アッラーを意識し、根源への責任を自覚する精神を示しています。そして、そのことがムスリムとしての特性であると聖クルアーンに記載されています。

アッラーのみもとで
なんじらのうち最も尊い者は
最もアッラーを意識する者である。
（聖クルアーン　第四九章一三節）

アッラーを意識することとは、人間に健全な良心を与えるものです。

信仰する者よ
もしなんじらが常にアッラーを意識するなら
アッラーはなんじらに
正邪を識別するための基準を与えるであろう。
（聖クルアーン　第八章二九節）

聖預言者は次のように説いています。

「もしアッラーをおそれる（大切にする）ため、信者の目から一滴の涙でも落ちるなら、アッラー

は彼を地獄から遠ざけるであろう」

ハディース（預言者言行録）の中のこの言葉は、アッラーへの責任の自覚がいかに重大であるか、人びとの行動にどれほどの影響を与えるか、その要素がいかに小さくとも現世と来世にわたって極めて大きな相違をもたらすことを明らかにしています。

イスラームの教えの中で特に強調されているのは、謙そん、慎み、欲情の制御、正直、誠実、忍耐および着実さであります。約束とか契約を完遂し、すべての信頼にこたえ、義務を果し、債務を返済するようアッラーから命じられているのです。道徳行為の広い面にわたって説いている聖クルアーンのいくつかの章節をあげてみましょう。

……しもべたちは
アッラーの目前にいる。
よく耐え忍び、誠実で敬虔に奉仕し
慈善のための財を使い
あかつきに罪の赦しを祈る者たちである。
（聖クルアーン　第三章一五―一七節）

……まことにアッラーは

堅固で着実な者をめでたもう。

（聖クルアーン　第三章一四六節）

なんじらの主の許しを得

天と地ほど広い楽園を得るため

それは主を意識し

順境においても逆境においても慈善をほどこす者

怒りをおさえ寛容にふるまう者のため

準備されている、

まことにアッラーは善い行いをする者をめでたもう。

また、不都合な行いをしたり過失を犯したとき

アッラーを念じて罪過の許しを請い

「アッラーの他にたれが罪を許せましょう」と祈る者

ならびにその犯した罪を故意にくりかえさぬ者、

これらの者への報奨は

主の寛大な許しと川の流れている楽園でとこしえに住むことである、

勉励努力する者への恩典は何んとよいことよ。
（聖クルアーン　第三章一三三－一三六節）

寛容を守り道理にかなったことを勧め、
無知で足れりとする者から遠ざかるべし
だが、もし悪魔の囁きがなんじらを盲目の怒りに駆るならば
アッラーに加護を求めよ、
まことにアッラーは全聴者・全知者である。
まことに、主を意識する者は悪魔の黒き示唆を受けるとき
即座にアッラーを念ずるであろう、
そのとき、見よ
いかに神なき仲間が誤りに誘うとも
かれらはたちどころに光を見る、
そして正しき道よりはずれることはない。
（聖クルアーン　第七章一九九－二〇二節）

朝な夕な主の慈顔を求めて祈る者と共にあれ、

現世の栄華を望んでなんじらの目をそらせてはならぬ
またわれが、その心に主を無視することを可能とした者
ならびに私欲を追い全ての道からはずれた者に従ってはならぬ。
（聖クルアーン　第一八章二八節）

なんじらは財産や生活において必ず試練にあい、
なんじら以前に啓典を得た者から、そして多神教徒から
心を痛める言葉を多く聞くであろう、
だがなんじらが耐え忍び、主の意識を持ちつづけるなら
それこそ全てを決定する要因である
（聖クルアーン　第三章一八六節）

礼拝の務めを守り、善いことを命じ、悪を禁じ
ふりかかる困難を耐え忍ぶなら
それこそ真の強固さである。
高慢に頬をふくらませ横柄に地上を歩いてはならぬ
うぬぼれ強く威張る者を

アッラーはめでたまわぬ。
歩きぶりを穏かにし声を低うせよ
まことに最もいとわしきはロバの声である。
（聖クルアーン　第三一章一七－一九節）

まことに
ムスリム男女、信仰する男女、献身的な男女
誠実なる男女、忍耐強い男女、謙虚なる男女
情け深い男女、斎戒する男女、貞節なる男女
そしてアッラーを多くたたえる男と女、
これらの者のためアッラーは
罪の赦しと偉大なる報奨を用意したもう。
（聖クルアーン　第三三章三五節）

虚偽をもって真実をおおってはならぬ
また、知っていながら真実をかくしてはならぬ。
（聖クルアーン　第二章四二節）

己れの誓った信仰を守りアッラーをおそれる者、
まことにアッラーは主を意識しつづける者をめでたもう。
(聖クルアーン　第三章七六節)

信仰するものよ、すべての務めをまっとうせよ。
(聖クルアーン　第五章一節)

アッラーは、下品で有害な行為を禁じています。それらを控えることは私たちの義務であり、誘惑に導くであろう状況をもっとめてさけるべきなのです。アッラーは次のように言っています。

私通の危機に近ずいてはならぬ
それは醜行であり悪の道である。
(聖クルアーン　第一七章三二節)

結婚の手だてが見つからぬ者は
アッラーの恵みによりその手だてを与えられるまで自制すべし。
(聖クルアーン　第二四章三三節)

預言者ムハンマドは、次のように言っています。

「謙譲と信仰とは、共に存立するものである。一方が失なわれれば、他方も同時に消失する。

なんじら信仰する者よ
まことに、飲酒とかけ事、偶像とくじ矢は、忌みきらうべき悪魔の業である
成功するためには、これをさけよ。

悪魔の望むところは、酒とかけ事によってなんじらの間に敵意と憎悪を起こさせ
なんじらがアッラーを念じ礼拝をささげることを妨げようとする、
それでもなんじらは慎しまないのか。

（聖クルアーン　第五章九〇―九一節）

聖クルアーン第五章三節には、禁じられた食物の事が述べてあります。
このような、ムスリムのとるべき道徳的態度と行為を要約して、預言者ムハンマドは次のように
説いています。

「主は私に九つの事を命じた。
私生活においても、公的な場でも、常にアッラーを意識すること。
怒れるときも喜びのときも、常に正しい話をすること。
貧富を問わず、常に中庸を歩むこと。

私から離れた者との友情を回復すること。
私をこばんだ者に与えること。
私を迫害した者を赦すこと。
私の沈黙は瞑想であり、
私の視線は訓戒となり、
私はいつも正しい事のみを命じること。」

4. 対人関係

人びとの互いの関係に対するイスラームの教えを要約するには、アラビア語の「ヒルム」の一語で足りましょうが、これは「忍耐と親切と容赦」を合わせた意味なのです。

日常生活のなかで必然的に、あらゆる種類の人びととの関係が生じます。人にはそれぞれ限界があり、弱点、誤ち、判断のまちがいなどはつきものです。他人を批判したり、侮辱したり、愚弄し恥かしめたり、あるいは他人に対して偏狭な態度をとったりすることは傲慢のあらわれ以外のなにものでもありません。

……怒りを抑えて人びとを寛容する者

まことにアッラーは
善い行いをなす者をめでたもう。

（聖クルアーン　第三章一三四節）

善と悪とは同じではない
人が悪をしかけても、いっそうよいことで悪を追い払え
そうすれば互いの間に敵意ある者でも
親しい友のようになるであろう。

（聖クルアーン　第四一章三四節）

親切な言葉と寛容とは
侮辱を伴う施しにまさる。

（聖クルアーン　第二章二六三節）

聖預言者は、召使いのあやまちは何度まで赦すべきかとの質問に対して、「一日七〇回まで赦しなさい。もし召使いの弱点を許容できなければ、彼を去らせなさい」と答えています。

悪口を言わず、詮索せず、自分が言われたくないようなことを他人の背後で言わぬことも寛容と親切の一部です。その人のため良かれとの意図でなければ、他人のことを秘密理に論議してはなり

ません。他人の失敗を知ったとき、それをかくしてやるのが良いのです。人を恥かしめてはいけません。そこには誤ちに対する認識より、感情を害した反抗的な態度が生ずるからです。

他人の信仰の深さとかまじめさを批判するべきではありません。何んらかの社会的行動が必要なとき以外は、他人の悪業とか悪い出来事について話してはならぬと命ぜられています。もちろん、宗教の品位を落したり愚弄する会話、または卑わいな会話に加わってはなりません。

なんじら信仰する者よ
ある男たちに他を嘲笑させてはならぬ
後者が前者よりすぐれているかも知れぬ、
また女たちに他の女たちを嘲笑させてはならぬ
後者が前者よりすぐれているかも知れぬ
互いに中傷してはならぬ
またあだ名でののしり合ってはならぬ
信仰に入った後は悪を暗示する名はよろしからぬ、
これを悔い改めぬ者、これらは不義者である。
なんじら信仰する者よ邪推をできるだけさけよ

まことに邪推は時として罪である
また無用のせんさくをしてはならぬ
また互いにかけぐちをきいてはならぬ……。
まことにアッラーのみなもとで最も尊い者は
なんじらのうち最も主を意識する者である。
まことにアッラーは全知者・通暁者である。

（聖クルアーン　第四九章一一―一三節）

秘密の会合の多くは、よくないことである。
ただし施しや善行を勧め、あるいは人びとの間を執り成す場合には
秘密が許される
アッラーのよろこびを求めてこれを行う者には
われはやがて偉大なる報奨を与えるであろう。

（聖クルアーン　第四章一一四節）

アッラーは
悪い言葉が公然と使われるのをよろこばぬ

ただし不当な目にあったその者による場合は別である。

（聖クルアーン　第四九章六節）

また、預言者ムハンマドは次のように説いています。

「ムスリムの誠実さのあかしは、自分に関係のないことに余計な注意をはらわぬことである。真のムスリムとは、その言動が他のムスリムにとって全く安心できるものである」

5. 社会的責任

社会的な責任についてのイスラームの教えは、親切と思いやりに基づいています。ただ親切であれという訓戒は、特定の局面においては忘れられることも多いので、イスラームではさまざまな親切行為を強調してあり、さまざまな人間関係において権利と義務を明確にしているのです。

広範囲にわたる人間関係のなかで、私たちの第一の務めは自分の家族、つまり両親、夫妻および子供たちに対するものであり、次には他の親族、隣人、友人と知人、孤児と未亡人、困窮者、ムスリム同胞、全人類および動植物、資源、環境保存へと及ぶのであります。

a、両親

イスラームの教えのなかで親に対する孝行は強く説かれており、それは信仰上重要な部分でもあります。

なんじの主が命ずる、
主だけを崇拝し、他の何者をも崇拝してはならぬ
そして両親に孝行であれ
両親かまたそのいずれかがなんじの生存中に老齢に達しても
軽侮の語や荒い言葉を使ってはならぬ
ねんごろにやさしくせよ
敬愛の情をこめ、やさしく謙虚に翼を低くたれ
「主よ、幼少のころ親が私を愛育してくれたように
かれらに慈愛を与えたまえ」と祈って言え。
（聖クルアーン　第一七章二三―二四節）

一人の男が預言者のもとに来て、「アッラーの使徒よ、私が一番面倒をみなくてはならないのは誰でしょうか」とたずねると、預言者は「それはお前の母である」と三度繰りかえして言い、そし

て、「その次は父親、そして近親者の順である」と答えました。

b、夫、妻および子供

アッラーは、男に対して自分の妻と子に必需品を与え、家庭内に宗教的雰囲気をかもしだし、妻と子の教育と幸福について責任をもつよう命じています。

女性は夫と子供たちの家庭内のことおよび子供の訓練についての責任を負っているのです。

相互の愛と信頼、二人の間の秘密を保つこと、互いの弱点を許し合うこと、愛情と思いやり、そして相手に対する親切心などが夫と妻の双方に課せられているのです。

子供は両親に対して協力的で、両親を尊敬し、従順でなくてはいけません。

男は女の擁護者（家長）である
それはアッラーが
一を他よりも強くされ、かれらが己れの資財から費やすゆえである
それで貞節な女はアッラーの守護の下に夫の不在を守る。
（聖クルアーン　第四章三四節）

かの女ら（妻たち）はなんじらの衣であり

なんじらはかの女たちの衣である。

（聖クルアーン　第二章一八七節）

預言者ムハンマドは次のように言いました。

「信者の中で最も完全な信仰をもつ者は、最良の地位をもち自分の家族に最も親切な者である。」

c、近親者

ムスリムが責任をもつ順序として、次にくるのが近親者であり、アッラーは血族関係について、次のように言っています。

近親者に与えよ、また貧者や旅びとにも

だが粗末に浪費してはならぬ。

（聖クルアーン　第一七章二六節）

かれらは何を慈善に使うべきかをなんじに問うであろう。

言え、

「両親と親族のため

孤児、貧者およびたび路にある者のために、善いものを

あなたがたのする善い行いは何んでもアッラーが完全に知りたもう」と。

（聖クルアーン　第二章二一五節）

d、隣人

人間の性格に対しては、その隣人の評価こそ当を得ている場合が多いのです。隣人に対して親切であり、できるだけの援助を与えることはムスリムの義務であります。

ある人が預言者に、「アッラーの使徒よ、親切であったか否かはどうすればわかるのでしょう」とたずねましたが、預言者は、「あなたの隣人が、親切だったと言えば、あなたは親切であった。もし隣人があなたを不親切であると言うなら、あなたは本当に不親切なのだ」と答えました。また預言者は次のようにも言っています。

「そばにいる隣人が飢えているとき、自分だけ腹一ぱい食べる者は信者ではない。またその行為によって隣人に不安をもたらすなら、その者は信仰をもたぬ」

e、孤児と未亡人

どの社会においても、孤児と未亡人は、保護と物資の供給を必要としています。たとえ未亡人が

夫の思い出に忠実であらんと再婚をきらった場合でも、それでも再婚した方がよいのです。預言者ムハンマドは、「未亡人と孤児のために尽力する者は、アッラーの道で努力する者である」と説いています。

また、孤児を引取って自分の子同様に育てるのは近親者の責務ですが、近親者がいなかったり、あるいは何んらかの理由で残された子供を引取らない場合には、他のムスリムまたはイスラームの団体ができるかぎりの思いやりをもって養育することが義務とされています。

またかれらは孤児についてなんじに問うであろう
言え、「かれらのため有利に取計らうのが最も良い
もし生活を共にするならなんじらは兄弟である
だがアッラーは善意の管理者と悪事をなす者とを知りたもう……」
(聖クルアーン二章　二二〇節、四章　二・六・一〇・一二七節、
一七章三四も参照せよ)

預言者は、「近親の、あるいは他人の孤児を責任もって養育する者は、この私と共に天国に入るであろう」と言い、人さし指と中指を並べて見せたのです。

f、困窮者

ザカート（喜捨）はイスラームの第三の柱であり、経済的余裕のあるムスリムすべてに課せられた義務です。（日本イスラームセンター発行のイスラーム入門シリーズ「ザカート」を参照下さい）

ザカート以外にも、聖クルアーンとハディースの中で慈善がくりかえし命ぜられています。これは、困窮者を援助するためできることをするのがイスラームで教えられている重要で基本的な部分であることを強調しているのです。この教えを忠実に守っていた時代のイスラーム社会は大いに繁栄し、ザカート基金の分配に適当な困窮者がいなくて困った場合すらあったのです。

慈善行為は、物質的な援助か他の種類の供与かにかかわらず、寛大で親切な気持で行なわなくてはならず、恥かしめを伴なったり、相手に負担を与えたりしてはいけないのです。

アッラーの道のため己れの財産を使い
そのとき負担や屈辱の思いをさせぬ者
これらの者に対する報奨は主のみもとにある、
かれらには恐れもなく憂いもないであろう。
親切な言葉と寛容とは侮辱を伴う施しにまさる
アッラーは富有者・仁慈者である。
（聖クルアーン　第二章二六三―二六四節）

信仰する者よ
なんじらの得たよい物と
われが大地からなんじらのため生産したものを与えよ
なんじら自身目をそむけずには受け取れぬような悪いものを
えらんで他人に与えてはならぬ
そしてアッラーは、一切不足なく満ち、
賛美されるべきであることを知れ。
（聖クルアーン　第二章二六七節）

なんじらは
施しをあらわにしてもよいが
ひそかに貧者に与えればなんじらのためさらによい
それはなんじらの悪業の一部を払い清めるであろう
アッラーはなんじらの行ないを熟知している
なんじらが施しに使うよいものはなんじら自身の魂のためであり

またアッラーに近づくためにのみそうせよ
使用した良いものは完全になんじらに返されよう
なんじらは不当に遇されることはない。

（聖クルアーン　第二章二七一－二七二節）

なんじらは
愛するものを喜捨せぬかぎり正義を全うし得ないであろう
なんじらが喜捨するどんな物でもアッラーは必ずそれを知りたもう。

（聖クルアーン　第三章九二節）

負債者がもし窮境にあるならば、そのめどのつくまで待て
だが慈善のため、帳消しにして喜捨することが
なんじらのため最もよいことを知らざるや。

（聖クルアーン　第二章二八〇節）

預言者は、こう説いています。

「二人の間の争いを公平にさばくのは、慈善である。所有する動物で他人の荷物を運べば、それも慈善である。良い言葉も、礼拝に向う一歩一歩も、そして道路上の危険物をとりのぞくことも、

やはり慈善である」
預言者は、すべてのムスリムが慈善を行なうべきである、と言いましたが、無一物の者はどうすべきかとの問いに対して、「両手を使って働き、得た利益を使いなさい」と答えました。
「それができない場合は？」
「困っている人、悲嘆にくれている人を助けなさい」
「それもできないときは？」
「そのときは、善いことをしなさい」
「善いことができないときは？」
「そのときは、悪いことをしないように。それも慈善である」
これら聖クルアーンの句とハディースによって慈善の意味はきわめて広く、他人を益したり助けたりすることとすべてが含まれるのを理解できるのです。

g、ムスリム同胞

ムスリムどうしの関係は、きわめて重要な問題であります。というのは、世界中のムスリムがアッラーの教えを守り、主の喜びのため努力し、イスラームの目標に向って助けあい、一つの共同体

を形成しているからです。ムスリムはすべて兄弟姉妹であり、互いに家族の一員として親切と思いやりに満ちた態度で接しなくてはなりません。

信者は兄弟である。

（聖クルアーン　第四九章一〇節）

なんじらは

アッラーのきずなにみなでしっかりとすがり分裂してはならぬ……。

（聖クルアーン　第三章一〇三節）

預言者ムハンマドは次のように述べています。

「全ムスリムは一つの身体のようなもので、目が痛めば全身が影響を受け、頭が痛めば、全身が影響を受ける」

「ムスリムは、他人に対して六つの良い行ないをしなくてはならない。すなわち、人に会ったら敬意を表して挨拶すること、招待に応じること、人がくしゃみをしたら「アッラーのご加護がありますように」（アラビア語でヤルハマキャッラー）と言うこと、病人を見舞うこと、葬儀に参列すること、そして自分の好むことを人にもほどこすことである」

「ムスリムは互いに兄弟であるから、他のムスリムを不当に扱ったり見すてたりはしない。同胞

を助ければ、アッラーが自分を助ける。兄弟の心配事を解決してやれば、審判の日にアッラーが自分の心配事を取り除いてくれる。ムスリムの秘密をかくせば、アッラーが審判の日に自分の秘密をかくしてくれる」

h、人類同胞

アッラーは、意志と行為によってのみ、人を評価します。出生、国籍、人種、金銭的成功、社会的地位などはアッラーにとって全く関係のないことなのです。私たちムスリムとしても、人間の作り出したこれらの差別や相違にとらわれることなく、公平と親切心とですべての人間に接するべきです。

人びとよ
われは一人の男と一人の女からなんじらを創り、民族にした
これはなんじらを互いに認識させるためである
アッラーのみもとで最も尊い者は
なんじらのうち最も主をおそれる者である
まことにアッラーは、全知者・通暁者である。
(聖クルアーン　第四九章一三節)

i、動物

親切と良い扱いは、人間だけでなく、動物にもさしのべなくてはなりません。預言者は動物を飢えさせたり、虐待したり、あるいは傷つけたりするのを固く禁じています。もちろんこのことは、できるだけ苦痛を与えず食用のため屠殺する動物、または人間に有害な蛇、サソリ、蝿、蚊その他を殺してはいけないとのことではありません。

地上の動物、あるいは双翼で飛ぶ鳥も
一つとしてなんじらと同じ衆生でないものはない。
（聖クルアーン　第六章三八節）

預言者が教友たちと旅行中、一寸の間一人でよそに行きましたが、その間教友の一人が二匹の雛を連れた鳥をみつけ、その雛をつかまえてきました。親鳥はもちろん翼を拡げて怒り後を追ってきました。その時預言者が帰ってきて、子供を取ってかの女を苦しめたのは誰か？かの女に子供たちをかえしなさい、と叱りました。

6. 経済的諸問題

イスラームでは、アッラーが万物の持主であり、人間が使用あるいは享受している土地、穀物、森、大洋、天然資源その他のあらゆるものもアッラーの所有物であると教えています。アッラーの地上における代理者である人間は受託者にすぎず、実際には何も所有していません。そこでムスリムは、富や財産をアッラーからの賜わり物と見なし、アッラーの喜びを目的として使うのです。すなわち自分と家族のため、両親と親族のため、孤児、未亡人、貧困者の必要を満たすため、そしてアッラーの道で努力するために使用するのです。

人間の生計は、正直な労働あるいは生産的な投資によってたてるべきですが、そうして得たものは、ただ蓄財したり、かっこよさのため消費したり、あるいは贈賄その他不正のもととなる事や他人を圧迫したり傷つけたりするために使ってはなりません。

同じ精神にもとづいて、地球の資源は人類全体へのアッラーの恵みですから、人類全体のために開発、利用すべきです。一部の人びとのため、あるいは有害な用途にもちいてはならないのです。一人で使うより共同で、競争より協力して、これがイスラームの精神です。そのためにこそ、高利（銀行利子については、禁じられているという説が強いが、擁護論もあり）賭博、富のためこみ、強欲、貪欲および浪費が、アッラーの禁止事項にふくまれているのです。

なんじらの財産をなんじらの間でむだに浪費してはならぬ
また不当と知りつつ他人の財産の一部をむさぼるため
裁判官への賄路としてはならぬ。

（聖クルアーン　第二章一八八節）

高慢でうぬぼれる者、りんしょくで他人にもりんしょくを勧める者
主に与えられた恵みを人からかくす者を
アッラーはめでたまわぬ。

（聖クルアーン　第四章三六―三七節）

なんじら信仰する者よ
倍にしまたも倍にして高利をむさぼってはならぬ
成功するためには、アッラーをおそれよ。

（聖クルアーン　第三章一三〇節）

信仰する者よ
なんじらの財産をなんじらの間でむなしく浪費してはならぬ
互いの合意による商取引を成立させよ……。
（聖クルアーン　第四章二九節）
なんじらの手を己れの首に縛りつけてはならぬ　（吝嗇はならぬ）
また限度を越え極端に手を開き恥辱を被むり困窮に陥ってはならぬ。
（聖クルアーン　第十七章二九節）
有頂天になってはならぬ
まことにアッラーは思い上っている者をめでたまわぬ。
アッラーからの賜わり物で来世の住まいをこい求め
この世での務むべき部分も忘れてはならぬ
アッラーがなんじに善きようになんじも善い行ないをせよ
悪事を行なおうとしてはならぬ
まことにアッラーは悪事を行なう者を好まぬ。
（聖クルアーン　第二八章七六ー七七節）

商業活動においては、正直、確実さおよび公正な取引を行なうことがアッラーへの義務であります。相手をだまし、不良品であることをかくして売ったり、相手の無知を利用して不正な利益をむさぼるのはムスリムとして禁止されていることなのです。

ムハンマドが預言者との資格を得る前から、メッカの人びとはかれをアル・アミン（信頼できる人）と呼んでいました。商売上のかれの公正な態度は、雇用者であった未亡人ハディジャに深い感銘を与え、ずっと裕福で年上だったにもかかわらず、かの女はムハンマドに結婚を申し込みました。

なんじらが互いに信用しているとき
信用された者には託されたことを忠実に果たさせ
かれの主アッラーをおそれしめよ
（聖クルアーン　第二章二八三節）

なんじらが計量するときは十分の量を与えよ
また正しいはかりで計れ
それはりっぱであり、また結果においても最良である。
（聖クルアーン　第一七章三五節）

なんじら信仰する者よ

なんじらが期間を定めて貸借するときは、それを記録にとどめよ……
そしてなんじらの仲間から二名の男を証人とせよ
二名の男がいないときは
証人としてなんじらが認めた一名の男と二名の女を立てよ
もし女の一人が間違っても他の女がかの女を正すことができよう。
期限を定めた取決めは、事の大小にかかわらず記録することを軽視してはならぬ。
それはアッラーの前でさらに正しくまた正確な証拠となり
後日に疑問点を残さぬため最も妥当である……。

（聖クルアーン　第二章二八二節）

7. 行政上の諸問題

行政官と裁判官は、きわめて大きい責任を担っています。もしかれらが、アッラーに対する義務を自覚せぬなら、圧力団体や自己の利益、あるいは偏見や好みに影響されて正義から離脱することも可能でしょう。

多少なりとも責任を持つ人間すべてに対して（それが一家のあるじであろうと一国の王であろうと）、正しく公正であれとアッラーは強く命じています。そのことは人間のアッラーに対する義務であり、国家利益の追求もこの務めを妨げてはならないのです。

信仰する者よ
アッラーのため公正な証人として堅固に立つべし
憎む者を扱うときも、不正に流れ、正義を離れてはならぬ
公正であれ、それは最も篤信に近い
そしてアッラーをおそれよ
アッラーはなんじらの行なうことを熟知したもう。
（聖クルアーン　第五章九節）

信仰する者よ
証言において、アッラーのため公正であれ
たとえ自分自身の、そして両親や家族の、利益に逆らってでも
あるいは富者に対しても、貧者に対しても、
常に公正であれ

アッラーは双方になんじらより近いのだ
それゆえ私欲に従って公正からそれてはならぬ
なんじらが正義をねじまげるなら
アッラーはなんじらの行ないを熟知したもう。
（聖クルアーン　第四章一三五節）

国民の福祉に関して統治者と政府の義務は、アッラーの律法に従い、正しく公正であることです。また国民としても、この大律法に違犯する命令でないかぎり、統治者や政府に従う義務があるのです。統治者や政府は国民の見解と要求をたしかめるため、国民またはその代表と相談しなければなりません。

何ごとをなすにも、互いに協議せよ。
（聖クルアーン　第四二章三八節）

信仰する者よ
アッラーに従え、み使いに従え
そしてなんじらのうち、権能を与えられた者に従うべし……。
（聖クルアーン　第四章五九節）

預言者は次のように言っています。

「好むや否やにかかわらず命令に従うのは、ムスリムの務めである。ただし、その命令がアッラーの道にそむくときは別であり、従ってはならぬ」

8. ジハード＝アッラーの道での努力

ジハードは、アッラーのために奮斗努力するという意味のアラビア語「ジハード・フィ・サビーリッラー」を短くした略語です。これには、イスラームの教えを人びとに伝え、説明すること、悪と汚濁に反対して働き、また不正、社会的不平等、文盲、貧困、疫病その他の問題のため闘う個人や団体に力をかすこともふくまれています。

またなんじらのうち一団の者は
人びとを善きことに招き
正しきを命じ邪悪を禁ずるであろう。
これらは成功する者たちである。
（聖クルアーン　第三章一〇四節）

なんじらは

人類につかわされた最良の教団である
なんじらは正しきを命じ邪悪を禁じ
アッラーを信奉する。

（聖クルアーン　第三章一一〇節）

信仰する者よ
アッラーをおそれ
アッラーへの義務を果し
アッラーに近づくよう念願し
アッラーの道のため奮斗努力せよ
おそらくなんじらは成功するであろう。

（聖クルアーン　第五章三五節）

人びとは
「私たちは信仰する」とさえ言えば
試みられることはなく
放っておかれるとでも考えるのか。

（聖クルアーン　第二九章二節）

奮斗努力する者は己れの魂のために努力するのだ
なぜならアッラーは
すべての創造物からの何をも必要とせぬ。
（聖クルアーン　第二九章六節）

アッラーの道のため努力することのいま一つの面は、圧迫されてムスリムとしての生活と行動ができないような土地から、それが可能である所へ移り住むことです。

迫害され
アッラーの道を貫くため他へ移住する者には
現世で必ず良い住いを与える
だが来世における報奨こそさらに偉大であることをかれらは知らざるや。
（聖クルアーン　第一六章四一節）

とはいえ、迫害者や侵略者に対抗して武器を取る必要が生じる場合もあります。ムスリムは、侵略行為をかたく禁じられてはいますが、かれらを攻撃したり圧迫する者に対して身を守ることをアッラーに命じられているのです。

なんじらに戦いをいどむ者があれば
アッラーの道のために戦え
しかし侵略者であってはならぬ
まことにアッラーは侵略者をめでたまわぬ。
（聖クルアーン　第二章一九〇節）

戦いをし向けられた者たちは、戦うことを許される
かれらは不当に扱われたからである
まことにアッラーはかれらを力強く援助する
かれらはただ
「私たちの主はアッラーである」
と言っただけで
正当な理由もなく家から追われた者たちである
もしアッラーが、ある人びとを他によって抑制せざれば
修道院でも、キリスト教会でもユダヤ教会でも
そしてイスラームのモスクでもすぐにも破壊されてしまうであろう

そこにはアッラーのみ名が多くのかたちで記念されているのに。

（聖クルアーン　第二二章三九—四〇節）

9. 結論

イスラームの道徳律は、他人との関係における義務と権利であると言えましょう。ここでは義務の面を強調してきましたが、他人への義務は当然相手の権利と見なすことができます。したがって「子供に対する親の義務」は「親に対する子供の権利」と言いかえることもできるわけです。

しかし、ここで強調しなくてはならないのは、イスラームで言う個人の権利と義務がアッラーから与えられたもので、人間の作った道徳理念によるものではないことです。イスラームで説いている態度と行為には、他の道徳律と共通のものが多いのですが、その精神において異っているのです。たとえば、商業活動において公正と正直を求めることは、べつだん変ったことではありません。ただ、それらがアッラーに対する義務であることを強調することによってイスラームは商業道徳を精神的原理へと高めているのです。ムスリムが正直で公正であるとき、かれは健全な商取引での利益を得るばかりでなく、アッラーの命に従うという精神的恩恵を得るのです。逆に、相手をだますとき、かれは同胞をうらぎるだけではなくアッラーにそむくことにもなるのです。

要するに、イスラームの道徳は、他人との関係において義務と権利を明示しており、その義務は同時にアッラーに対する義務でもあることを強調しているのです。その教えは、正直、親切、正義慈善その他における根本的態度を示しており、その基本原理は二十世紀今日でも、七世紀のアラビアと全く同じように通用するものなのです。

そしてなんじらは
アッラーのご法が決して変らぬことを知るであろう……。
(聖クルアーン　第三五章四三節)

(M・A・K)